

学習指導要領における神話の位置づけと教材化の検討
—小学校の国語教材「いなばのしろうさぎ」を中心に—

小 川 雅 子

地域教育文化学部

山形大学紀要（教育科学）第17巻第2号別刷

平成31年（2019）2月

学習指導要領における神話の位置づけと教材化の検討 —小学校の国語教材「いなばのしろうさぎ」を中心に—

小川 雅子

地域教育文化学部

(平成30年9月28日受理)

要 旨

情報通信技術の急速な発展などによる教育環境の様々な変化に対応するため、平成18(2006)年に教育基本法が改正された。それを受けた平成20(2008)年の学習指導要領(国語)では「伝統的な言語文化」が重視され、小学校1・2年生の内容に「神話」が加わった。現在、5社のうち4社の教科書に「いなばのしろうさぎ」の教材がある。本論文ではまず、教科書の再話教材が一義的な動物譚や教訓譚に書き換えられている実態に基づき、原典である『古事記』との比較を通して、「神話」というジャンルの特性とその教材性を明らかにした。次に、小学2年生を対象に調査を行い、児童には多義的な原典の内容を理解する力があることを確かめた。その上で、グローバルな現代社会において世界の神話を視野に入れた「伝統的な言語文化」としての「神話」の新たな位置づけと、その観点からの教材化と指導について考察した。

キーワード：神話・いなばのしろうさぎ・伝統的な言語文化・学習指導要領・再話教材

1. 学習指導要領における「神話」の位置づけ

情報通信技術の急速な発展によるグローバル化や価値観の多様化等によって教育環境は大きく変化し、様々な課題が顕在化してきた。そのため、平成18(2006)年には、「科学技術の進歩・情報化・国際化、少子高齢化・核家族化、価値観の多様化、社会全体の規範意識の低下」等への対応として、教育基本法が改正された。

改正教育基本法の前文には、「公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成」、「伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する」ことが加えられ、「我が国の未来を切り拓く教育の基本を確立」と示されている。第二条には「教育の目標」が新たに規定された。その第一項に「幅広い知識と教養、豊かな情操と道徳心、健やかな身体」が加えられ、第二項では「能力、創造性、自律の精神、職業」の語が加えられた。第三項では「男女の平等、公共の精神」、第四項では「環境の保全」等が新たに追加されている。第五項は「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」とある。昭和

22 (1947) 年に日本国憲法の精神に則り制定された教育基本法は、59年を経て世界の国々が国境を越えて情報や地球規模の課題を共有する時代になり、予測不可能な社会における教育の新たな方向性を示すために改正されたことになる。

教育基本法改正の趣旨を受けて、平成20年の学習指導要領（国語）では、「伝統的な言語文化に関する指導の重視」が改訂の要点の一つになった。『小学校学習指導要領解説国語編』（以下、『解説』という）には、「伝統的な言語文化は、創造と継承を繰り返しながら形成されてきた。それらを小学校から取り上げて親しむようにし、我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつないでいくことができるように内容を構成している」¹⁾とある。そして、小学校1・2年生の「伝統的な言語文化に関する事項」に、次のように「神話」が明示された。

(ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。

これを平成10年版学習指導要領と比較すると、小学校低学年の「読むこと」の内容であった「昔話や童話などの読みきかせを聞くこと」が、平成20年版では「童話」が消えて、「昔話」は「伝統的な言語文化」に関する事項になった。そこに「神話・伝承」が加えられたことになる。平成20年の『解説』では、「昔話や神話・伝承は、国の始まりや形成過程、人の生き方や自然などについての古代からの人々のものの見方や考え方が、長い歴史の中で口承だけでなく筆記された書物として、現在に引き継がれたものである。」と大きくまとめられた上で、次のように説明されている。²⁾

「昔話」は、「むかしむかし、あるところに」などの言葉で語り始められる空想的な物語であり、特定または不特定の人物について描かれる。

「神話・伝承」は、一般的には特定の人や場所、自然、出来事などと結び付けられ、伝説的に語られている物語である。

「神話」というジャンルの特性は明確に示されていないが、「神話・伝承については、古事記、日本書紀、風土記などに描かれたものや、地域に伝わる伝説などが教材として考えられる。」と書かれている³⁾。

さらに、平成29年告示の学習指導要領において「神話」は、〔知識及び技能〕の「(3) 我が国の言語文化に関する事項」に位置づけられて、次のように改められた。

ア 昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞くなどして、我が国の伝統的な言語文化に親しむこと。

平成20年版では「読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりする」言語活動を行うことがねらいであったが、平成29年版では「読み聞かせを聞く」という言語活動を通して「我が国の伝統的な言語文化に親しむ」ことがねらいとして明言されている。

以上のように、学習指導要領では、「神話」⁴⁾ というジャンルの特性は明確に示されないまま、小学校低学年向けに「易しく書き換えたもの」の「読み聞かせを聞くこと」によって「伝統的な言語文化に触れる楽しさを実感できる」ようにすることが求められてきた。学習指導要領におけるこのような位置づけは、教科書における「神話」教材とも密接に関連している。本稿では、学習指導要領改訂に伴って国語教科書に採用された「いなばのしろうさぎ」の分析を通して、原典である『古事記』の「稲羽の素戔」との違いから生じている課題を整理し、グローバルな現代社会を生きる学習者に応じた、新たな神話の位置づけ

と教材化の方向性を明らかにする。(以下、再話は「いなばのしろうさぎ」とし、『古事記』原文は「稲羽の素兎」とする。)

2. 教科書における「いなばのしろうさぎ」

戦後の国語教育には神話の教材化や指導に関する実践や研究の蓄積がない。そのため、国語教科書に掲載された教材によって初めて日本神話を知った、という教師も多い。⁵⁾ 筆者が大学生96名を対象に行った調査でも、イザナギ・イザナミの国生み神話を「知っていた」と答えたのが16名(16.7%)に対して、「知らなかった」と答えたのは33名(34.4%)であった。「マンガやゲームのキャラクターとして神名を知っていた」という学生などが「少し知っていた」と回答している。⁶⁾ 国語教科書によって日本神話をはじめて知る児童や教師が多い現状において、神話が教科書にどのような教材として掲載されているのかを知ることが重要である。そこで、「いなばのしろうさぎ」の再話教材について比較検討する。

(1) 現行教科書と国定教科書

平成23年発行の教科書では、5社のうち4社が「いなばのしろうさぎ」を取り上げている。三省堂(宮川ひろ「いなばの白ウサギ」)の教材は1年下に掲載され、ウサギを中心とした時系列の話に書き換えられている。それ以外の3社は2年上の教科書に掲載されている。教育出版(福永武彦「いなばのしろうさぎ」)の教材は、『『おおくにぬしのぼうけん』(岩崎書店1977年)を、教科書用に一部を抜粋し加筆訂正したものである。「お母さんのちがうすえの弟で、いつも兄さんたちからばかにされていました。」という1文や「ばかなわにたちは」の「ばかな」が、教科書では削除されている。⁷⁾ 光村図書(中川季枝子「いなばの白うさぎ」)では、「きいてたのしもう」という単元名で36・37頁に二つの絵があり、本文は巻末に「ふろく」として掲載されている。東京書籍では、「いなばの白うさぎのお話」「やまたのおろちのお話」「海さち山さちのお話」のあらすじの一部分を紹介しているが、平成27年の教科書には、川村たけし「いなばの白うさぎ」を掲載している。

「いなばのしろうさぎ」の話は、『古事記』上巻の大国主神話の一部である。「稲羽の素兎」の冒頭は、次のようになっている。⁸⁾

故、此の大国主神の兄弟は、八十神坐しき。然れども、皆、国をば大国主神に避りき。避りし所以は、其の八十神、各稲羽の八上比売に婚はむと欲ふ心有りて、共に稲羽に行きし時に、…略…

こうして稲羽へ行く途中、気多岬で八十神が「裸の兎」に出会うところから話が始まる。八十神に言われた通りにした裸の兎が、さらに痛みが激しくなって苦しんで泣いているところに、大国主神が通りかかった。大国主神は兎に泣いている訳を聞き、兎はそれまでの経緯を語る、という展開になっている。

この話は明治36年の第一期国定教科書では『高等小學讀本一』に「因幡の兎」として掲載されている。第二期以降は、尋常小学校2年生の教材(巻四)として戦後の第六期まで継続して掲載されている。棚田真由美は、国定教科書における『古事記』教材について調査し、特に第四、五期の国定教科書で増加した『古事記』教材には日本の国体と結びつけた説明が加えられていることを明らかにしている。しかし、その観点からの「いなばのしろうさぎ」への言及はない。⁹⁾ そこで、戦中の第五期と戦後の第六期の「いなばのしろう

さぎ」をみると、どちらにも政治的な言葉はない。はじめとおわりは、次のようになっている。

第五期（昭和16年）白兎¹⁰⁾

白兎が、鳥から向かふの陸へ行ってみたいと思ひました。…中略…

白兎がそのとほりにしますと、からだはすぐもとのやうになりました。喜んで大國主命に、「おかげさまですっかりなほりました。あなたはおなさけ深いおかたですから、今は重いふくろをせおっていらっしゃっても、のちにはきっとおしあはせにおなりでせう。」と申しました。

第六期（昭和22年）白うさぎ¹¹⁾

白うさぎが、鳥からむこうの陸へいってみたいと思いました。…中略…

白うさぎがそのとおりにしますと、からだはすぐもとのようになりました。

冒頭文からわかるように、どちらも大国主神話としてではなく、兎が中心の時系列の話に書き換えられている。さらに戦後の第六期では、第五期にあった兎の感謝や予言的な発話が消え、「八十神」も神としてではなく「みなりのりばなかがた」と書き換えられて、時系列の動物譚になっている。

このようなかたちで国定教科書に掲載されていた「いなばのしろうさぎ」が、新しい時代を見据えて位置づけられた「伝統的な言語文化」の神話教材として、再び教科書に掲載された。その内容にはどのような変化があるのか、それぞれの再話を検討して神話教材をめぐる課題を明らかにする。

(2) 一義的な「昔話」に読み替えられた「いなばのしろうさぎ」

平成23年の教科書から教育出版の福永作品と光村図書の中川作品について分析している谷本由美は、まず教科書の単元名と冒頭文に着目している。教育出版の単元名は「むかしのお話をよむ」である。光村図書の単元名は「きいてたのしもう」であり、教材文は「むかし、むかし、大むかし。」という一文ではじまっている。これらのことから、両社とも「神話よりも昔話というジャンルの物語に位置づけて紹介している特徴が指摘できる」¹²⁾と述べている。

谷本はこの論文で、1年下の教科書に再話が掲載されている三省堂と、あらすじの部分的紹介となっている東京書籍を比較の対象から外している。そこで、平成27年の教科書について、本稿で言及している点について比較した結果を、「教科書における書き換えの比較」として表にまとめた。これを見ると、三省堂の単元名「むかしばなしをたのしもう」と冒頭文「とおいとおいむかしのことです」、東京書籍の単元名「言いつたえられているお話を読もう」にも、谷本の「神話よりも昔話というジャンルの物語に位置づけて紹介している」という指摘があてはまる。これは、『解説』における「昔話・神話・伝承」の説明の曖昧さとも関連していると考えられる。

谷本は2社の教材を『古事記』と比較して考察した結果、次のように述べている。¹³⁾

(一) 福永作品と中川作品では物語の主人公が異なる（オホクニヌシか兎か）が、それは古事記そのものが持つ多義的な構成に由来すると考えられる。(二) 「いなばのしろうさぎ」を昔話のように導入したり、八十神とオホクニヌシを人間のように性格付けすることによって、読み手はこの作品が神話であるという印象を持ちにくくなっている。(三) 両作品とも兎を動物として解釈しているが、古事記の持つ多義性を尊重する

なら、兎神としての特徴にも目を向ける必要がある。(四) 第三と同様に、和邇の解釈についても、多義的に解釈できるような工夫をするのが良いと思われる。

これらの指摘は、4社の教材全てに共通することが、表からも確認できる。

八十神と大国主神に人間のような性格付けをしていること、具体的には、善人と悪人のような対照的な性格付けをしていることは、『古事記』に「帛を負せて、従者と為て率て行きき」と書かれていることや、「帛を負へども、汝が命、獲む」という兎の言葉のためと考えられる。「帛を負せて」については、『日本書紀』の雄略天皇14年の条に、罪人の子孫を二分して「一分は茅渟県主に賜ひて、負囊者としたまふ。」¹⁴⁾とあることから、囊(ふくろ)をかつぐのは賤しい者の仕事であったことがわかる。したがって、同じ兄弟でありながら、一人だけ「帛を負せて、従者として率て行きき」という叙述は、ただならぬ兄弟関係を暗示している。再話教材がどれも、八十神を「いじわる」、大国主神を「やさしい」と表現していることには、このような根拠がある。そこから、「いじわるな」八十神は兎に苦痛を与え、「やさしい」大国主神は兎を治し、それによって良い結果を得たという、一義的な教訓譚になったと考えられる。

しかし、原典である『古事記』には、八十神と大国主神の心理や性格、教訓等を示す言葉はない。このような性格付けはみな再話者の解釈によって行われている。

また、八十神と大国主神をめぐるには、性格とは別の解釈もある。『日本書紀』には「稲羽の素兎」の話はないが、大国主神の一書に、次の様な記述がある。

夫れ大己貴命、少彦名命と力をあはせ心を一にして、天下を經營り、復顕見蒼生と畜産との為は、其の病を療むる方を定め、又鳥獸・昆虫の災異を払はむが為は、其の禁厭の法を定めき。是を以ちて、百姓今に至るまでに感恩頼を蒙れり。

大国主神が傷を治す療法を知っていたこと、それが人々に恩恵を与えたことが記されている。平安時代初期の薬物書である『本草和名』には、蒲の花の上の黄粉が治血・治痛薬として用いられていたという記述がある。そこから、八十神は治療の方法を知らなかったので間違ったことを教えた、大国主神は治療法の知識があったので兎を治すことができた、という解釈を述べている注釈書が多い。

さらに兎については、『古事記』の「今に菟神といふ。」という記述が、どの再話教材からも省略されている。原田留美は、東京書籍の川村作品を福永作品や中川作品と比較した上で、川村作品が「原典の古事記の雰囲気より伝わりやすい再話となっている」¹⁵⁾と述べているが、それでも「兎神」という言葉は省略されている。これによって兎は単なる動物となり、各再話は神話としての世界観や多義性を失った「一義的な昔話」となっているとして、谷本は次のように述べている。¹⁶⁾

それは政治的な議論を回避するには有効であったが、古事記の持つ多義的で豊かな世界観を失うことになったと言えるだろう。また、神を人間と同じような存在として一義的に理解することが、戦前の国定教科書時代に行われてきた教育と通じている可能性についても考える余地があるだろう。そもそも神話とは多義的であるがゆえに、読み手の視点によっていくつもの物語を読み取ることができるものである。近代において、皇国史観と関連付けて一義的に神話が読み替えられたことも、そのためだと考えられる。神話が時代や文化、社会、人々の価値観に応じて読み替えられていくのならば、私たちは近代に行われた読替を安易に踏襲するのではなく、現代に応じた読み方

を検討してみる必要があるのではないか。

西郷信綱も、神話の多義性について、次のように指摘している。¹⁷⁾

神話は独自の比喩表現であるからその意味は曖昧多義であり、一義化することは難しい。かんたんに一義化できれば、それはもう神話でないといえなくもないような本質を神話もっている。

「神話」は、どのような時代のどのような年齢の読者にとっても、主体的に自らの解釈を創造できる比喩性・多義性を持っている。佐佐木隆は、平安時代以降の説話集に見える話と、神話・伝説との間には大きく異なる点があることを指摘している。すなわち、平安時代以降の説話には、「然れば……まじきなりとぞ言ひ伝へける」という教訓的な文句や、「然れば、みな前世の報と知るべきなり」のような仏教色の強い文句で結ばれていることが多いが、「より古い神話・伝説の場合は、そのような思想的なまとめの文句が末尾に付されていることはまずない。どの神がどのようなことをしたとか、どの天皇の代にどういうことがあったかと語るだけであるのが、普通なのである。」¹⁸⁾と述べている。このような神話の本質的な特徴を捨てて、一義的な教訓譚として書き換えられた話を、「神話」といえるかという疑問が生じる。そこには、児童が自由に想像し主体的に解釈する余地も失われている。

子ども向けの一般図書という観点からは、作者の一義的解釈による再話には独自の価値がある。しかし、「児童の主体的な読みの力を育て伝統的な言語文化に親しむ」教材としては、再話者による教訓譚ではなく、神話の比喩性・多義性という本質に触れさせる視点が重要であると考えられる。「神話」から教訓を読み取るとしても、それは再話者から与えられる教訓ではなく、児童自身が直接読み取るものでなければならない。個々の児童が、自分なりの教訓や疑問を読み取る権利を行使するところに、伝統的な言語文化としての神話を知る意義があると考えられる。

(3) 「稲羽の素戔」の多様な解釈

表からは、教科書の各再話が多様に異なっていることがわかる。それらの違いには、『古事記』解釈の違いが表れている。

① 兄弟の八十神

「八十神」について、福永作品と中川作品では80人という実数として再話されている。川村作品と宮川作品では「たくさん・おおぜい」となっている。

八十神について、『古事記伝』には「八十神は、たゞ多きを云めり。必八十柱と限れるには非じ。」¹⁹⁾とある。『万葉集』にも「八十氏人・八十隈・八十島・八十瀬・八十伴緒・八十をとめ」等などの用例が見られる。これらのことから、「大勢の神」という解釈が多くの注釈書で共有されている。

また、大国主神と八十神の関係について、福永作品では「兄弟」とし、中川作品・川村作品では大国主神を「すえっ子」と表現している。宮川作品には記載がない。倉野は、これを「兄弟軋轢の説話（或いは幼者成功説話）」と解釈し、次のように述べている。²⁰⁾

この型の説話は、(1) 兄弟が争ふうち、初めは弟（幼者）が苦しめられること、(2) 併し弟（幼者）は第三者の支援を得ること、(3) そして最後に弟（幼者）が勝利を得ることの三点を骨子とするものである。

大国主神を末っ子としている再話は、この幼者成功説話を構想していることが推察でき

る。

ちなみに、子ども向け「稲羽の素兎」のはじまりとされる明治期の「ちりめん本」、*JAPANESE FAIRY TALE SERIES* では、次のように書かれている。²¹⁾

Now, there were once eighty-one brothers, who were Princes in the land. ……

Although eighty of these brothers were jealous of one another, yet they all agreed in hating, and being unkind to the eighty-first, who was good and gentle, and did not like their rough, quarrelsome ways.

昔、その国に81人の“Princes”がいた、という始まりから、その国の皇子の話であって、神々の話ではないことがわかる。80人の兄弟は皆嫉妬深くて81番目の弟を嫌っていた。大国主神は固有名詞で示されることはなく、登場する度に、“eighty-first brother”、81番目の弟と繰り返される。八上比売も固有名詞ではなく、“the princess of Inaba”となっている。このように、最初に子ども向けに書かれた「いなばのしろうさぎ」は、「神話」ではなく「昔話」として英訳されている。石澤小枝子は、35の話が収められている『日本のお伽の世界』（明治20年）について、「昔話とは限らず神話、伝説、巷談が混ざっており、順番にも特に配慮があるとは思えないが、日本においてもこれらを厳密に分類して考えるようになったのは大正期にはいつてからなのだから批判するのは当たらない。」²²⁾と述べている。

このように、明治時代の児童向け昔話集から「神話」が「昔話」として紹介されてきたことも、教科書教材に影響していると考えられる。問題は、このようなことが教材化の観点から議論されてこなかったことにある。

② 和邇

福永作品では「わに」、中川作品では本文に「わに」とあり「さめのこと」という注がつけられている。川村作品では「さめ」、宮川作品では「サメ」となっている。

日本に鰐は生息していないが、『古事記』には「海幸山幸」の話にも「一尋和邇」、「八尋和邇」とある。また『出雲国風土記』に「凡そ南の入海所在雑物は、入鹿、和爾、……」（島根郡）とある。このような記述から「和邇」は海に住むものであることがわかる。さらに、出雲や隠岐の方言では鱧や鮫の類をワニと言うことなどからも、「和邇」は「鮫」と考えられている。『箋注倭名類聚鈔』に「和迺鮫魚之一種」とあり、国定教科書で「わにざめ」と書かれてから、それ以降は挿絵でも鮫の絵が一般的になった。

これに対して、「南方系統のワニ神話が群島に輸入せられて後、北方系統の神話がこれに参加し、ワニからサヒへ、サヒからサメへ転訛したものであらう。換言すれば、初めは真生の鰐魚の神話であつたが、鰐魚のない地方へそれが拡がって来て、終に鮫類を意味するワニに変わつて往つたといふことに疑ひはない。」²³⁾という西村真次の説もある。

また、「和邇」は「鰐」でも「鮫」でもなく、神話における想像上の生き物であるから「和邇」だとする説もある。

このように多様な解釈が可能であるところから、それぞれの再話によって異なる表現となっている。

③ 素兎

各再話の題名は、福永作品では「しろうさぎ」、中川作品と川村作品では「いなばの白うさぎ」、宮川作品では「いなばの白ウサギ」となっている。

『古事記』には、和邇が「衣服を剥ぎき」とあることから、「素」を「白」ではなく「裸」

とする解釈もある。前述した英訳のちりめん本では、“THE HARE OF INABA”というタイトルの挿絵の兎は赤い服を着ている。²⁴⁾

For the last crocodile, the one which lay at the very end of the row, seized me, and plucked off all my fur.”

この文に対応する挿絵では、兎の赤い服が剥ぎ取られている。

「素兎」の「素」を「裸」と解釈すればシロとは訓まないし、「白」と解釈すれば「白」に「素」の字を用いた用例が上代の文献にはないことが問題となる。「素」は「裸」か「白」かについては、宣長も決めかねていて、「人猶考へてよ。」²⁵⁾と書いている。さらに、「素」は「白」でも「裸」でもないとする説や、『古事記』に出てくるうさぎはノウサギであることから、ノウサギの毛は蒲の穂黄が採れる夏場には白くならないので、「素」は「白」ではないとする説もある。また、赤田光男は、この話に「自然を崇拜する族長たちの行動と思想が象徴的に描写されている」として、次のように述べている。²⁶⁾

ノウサギは本州、四国、九州に棲息する。毛の色は西日本では終生黄褐色、東日本では冬期のみ白色で、冬期がすぎると黄褐色となる。したがって、西日本で白兎が出現すると、奇端として珍重された。…中略…素は白のことで…中略…白いウサギやカラスが靈魂の象徴と見なされていたのは当然である。白馬、白蛇、白鳥、白虎などいずれも神性を有する生物として聖視された。

このように諸説あって解釈が定まらない点が、再話の多様な表現につながっている。

さらに兎については、鎌倉時代中期にまとめられたといわれる『塵袋』第十に、「稲羽の素兎」の前段のような出来事が加えられている話がある。ここでは、「老タル兎」となっていて、隠岐の島にいた理由が記されている。²⁷⁾

アルトキ、ニハカニ洪水イデキテ、ソノ竹ハラ水ニナリス。浪アラヒテ竹ノ根ヲホリケレバ、皆ナクヅレソソジケルニ、ウサギ竹ノ根ニノリテナガレケル程ニ、オキノシマニツキヌ。水カサヲチテ後チ、本所ニカヘラント思ヘドモ、ワタルベキチカラナシ。兎が隠岐の島にいたのは、洪水で流されてきたので、なんとしても海を渡って帰りたいかたという経緯が語られている。これは「平安期の散佚誌か。」と注にある。教科書の再話は『古事記』を原典としているので、この部分はない。

原田留美は、3社の教材を比較してその表現が大きく異なっていることについて²⁸⁾、

作品論の立場から各再話作品について考えたが、作品としてこれだけ個性が違うのなら、教材としての扱いにも影響がまったく及ばないということは考えにくいのではないか。…中略…授業準備段階で教師が作品研究を行う際には、各再話作品の特徴について十分に検討確認する必要があるのではないか。

と述べている。原田の指摘は重要であるが、神話教材の現状の問題解決を、自身も学んだ経験が無い教師にだけ委ねることはできない。学習指導要領における「神話」というジャンルの位置づけと、教科書教材としてのねらいを明確にしなければならないと考える。

3. 『古事記』の文脈と再話の構成

前述したように、「稲羽の素兎」は、「故、此の大国主神の兄弟は、八十神坐しき。然れども、皆、国をば大国主神に避りき。避りし所以は、其の八十神、各稲羽の八上比売に婚

はむと欲ふ心有りて、共に稲羽に行きし時に、……」とはじまる大国主神話の一部である。すなわち、大国主神が国を治めることになった理由が、稲羽の素戔の話だけでなくその後まで続いているのである。そこには、「根の堅州国訪問」という、次のような話がある。

- 怒った八十神の謀によって、焼き石を抱きとめたことにより大国主神は死ぬ。
- 母のミコトの願いがきかれ、キサカイヒメとウムカイヒメの治療によって、大国主神は生き返る。
- 再び八十神の謀によって、木の割れ目に挟まれて大国主神は死ぬ。
- 母のミコトが見つけて生き返らせ、オオヤビコノカミのもとに逃がす。
- 八十神は追いかけて来て、弓に矢をつがえて大国主神の身柄を渡すように迫る。
- オオヤビコノカミは、根堅州国のスサノオノミコトのもとに逃がす。
- 根堅州国では蛇の部屋に入れられるが、スセリビメからもらったひれで難を逃れる。
- 次の夜は百足と蜂の部屋に入れられるが、スセリビメからもらったひれで難を逃れる。
- スサノオノミコトの命で矢を探しに荒れ野に入った時、火をつけられて逃げ場を失うが、鼠に助けられる。
- 大国主神は、スセリビメを背負って根堅州国から逃げ帰る。

『古事記』には一貫して神々の言動が記されているだけで、心理描写や教訓の言葉等はない。なぜ八十神は執拗に追いかけてきて大国主神を殺そうとするのか、なぜスサノオノミコトは次々と厳しい試練を与えるのか等、すべて読者の想像と解釈に委ねられている。²⁹⁾しかも、大国主神は受難の度に、必ず誰かの助けを得て試練を乗り越えている。そして、根堅州国から逃げ帰ってきた大国主神は、スサノオノミコトに言われたように生太刀と生弓矢で八十神を退けて、「国を作りはじめた」。ここで、冒頭の「避りし所以」を語り終えたことになる。したがって、『古事記』の文脈においては、「稲羽の素戔」の話は独立して完結しているのではなく、冒頭文の一部の内容である。

しかし、再話教材には、次のような結びの文がある。

- ・それからというもの、「オオクニヌシこそ、八十人の兄弟の中でいちばんすぐれた方だ。」と、世につたわるようになりました。
- ・かしこくて、心のやさしいおおくにぬしのみことは、この国をよくおさめて、人びとのくらしは少しずつゆたかになっていきました。

これらは、その後の様々な受難をすべて省略して大国主神を讃えていることになる。それは『古事記』の文脈とは大きく異なっている。そもそも『古事記』には大国主神を讃える言葉はない。

兎を助けた出来事から大国主神に「やさしさ」という性格を付与し、その後の経験をすべて捨象して、やさしい大国主神が国を治めたすぐれた方だと讃えるのは、神話の世界観とは異なる価値観である。これは、「皇国史観と関連付けて一義的に神話が読み替えられたこと」と同じように、「やさしさ」という一義的な価値観によって神話が読み替えられていることになる。

このことは、前述したちりめん本から存在している問題である。そこには、次のように書かれている。³⁰⁾

Which things came to pass, for the Princess would have nothing to do with those eighty bad brothers, but chose the eighty-first who was kind and good. Then he was made King of the country, and lived happily all his life.

80人の兄弟は「eighty bad brothers」と、81番目の弟は「kind and good」と位置づけられ、81番目の弟はその国の王となって生涯幸せに暮らしたと、一義的にまとめられている。

さらに、この81番目の弟が兎に、衣服を剥がされたのは当然の報いだ、と言っている場面がある。

“And serve you right too, for being so tricky.” said the eighty-first brother; ……

これについて谷本は、「悪者八十神が苦しみ、善者オホクニヌシが助けた兎は善ではないと、教訓譚としては辻褄が合わない。」³¹⁾ので、その矛盾を解決するために、この台詞が加えられていると指摘している。

再話は、辻褄の合わない過去の神話を、時代の価値観や思想に合うように再創造している。したがって現代では、いじわるな神ではなくやさしい神が望みを叶えた教訓譚と読むことも、治療法を知らない八十神とその知識を持っている大国主神と読むことも、和邇を欺した兎がいじわるな八十神のためにさらにひどい目に遭ったがやさしい大国主神に助けられた話と読むことも可能である。しかし、「欺した兎が神になる」という日本神話の独自な内容は、現代の思想や価値観とは整合性がとれないので、どの再話でも切り捨てられている。辻褄の合わないことを切り捨てて現代の価値観に合うように書き換えられた話は、もはや「伝統的な言語文化」としての神話ではないことになる。

4. 解体された「神話」とグローバルな視点

再話教材には、大国主神が中心の話と兎が中心の話がある。中川作品と川村作品は、『古事記』の構成にそった大国主神が中心の話となっている。川村作品では3枚の挿絵の2枚に「おおくにぬしのみこと」が描かれている。前述したように、中川作品と川村作品では大国主神を讃える文で締めくくられている。

福永作品と宮川作品は、兎が中心の話になっている。福永作品では「—これが、いなばのしろうさぎです。」で締めくくられ、宮川作品では「ウサギは、オオクニヌシノミコトがあるいていったほうをむいて、おれいをいいました。ふかくふかくあたまを下げて、なんべんもなんべんもおれいをいったのでした。」と締めくくられている。この二つの再話には、「やがみひめ」の名前は出てこない。さらに、宮川作品では時系列のわかりやすい構成に書き換えられていて、4枚ある挿絵にも大国主神の姿はまったく描かれていない。時系列への書き換えは、明治時代に日本の児童向けにまとめられた巖谷小波『日本昔噺』の「兎と鰐」（明治28年）から行われている。³²⁾ 国定教科書でも小学2年生向けの教材となった第二期（明治43年）以降は、兎が中心の話として時系列で完結している。

このように中心人物が異なる再話が可能になるのは、『古事記』の構成によるところが大きい。「稲羽の素兎」の話が、インドや東南アジアから伝えられた動物譚の影響を受けていることは広く指摘されている。小さくて力のない賢い動物が知恵を働かせて、恐ろしい動物を欺き難を逃れる話として、猿・小鹿・兎等の小動物がワニを欺く話がいくつもある。いずれも、弱い者が知恵で難を逃れワニが騙される話として紹介されている。そのような話

が伝えられて大国主神話に組み込まれた時、和邇が兎の「衣服を剥ぎ」、兎はその後「兎神になる」という新たな内容が加わった。

関根賢司は、神話の構造について、次のように述べている。³³⁾

神話もまた、さまざまなタイプやモチーフへと解体されつつあるかのように見受けられるのだが、神話学は、それら析出されたタイプやモチーフを世界の神話と比較し、その系統や伝播を考えることによって、ある民族や国家に固有のものだと信じられてきた神話を解体することにも寄与しているのだから、それはそれでよいとしなければならない。だが、神話は、言葉によって織りなされている表現でもあるのだから、文学研究にとっても貴重な対象であって、文学研究の神話論は、神話の構造を考える神話学とはおのずから袂を分かつたなければならぬであろう。

国語教育における神話教材の検討という立場には、神話学の視点も文学研究の視点も必要であると考えられる。東南アジア系の動物譚が伝播されて、その話が日本神話に組み込まれたことを知ることはグローバルな観点から「我が国の伝統的な言語文化」の裾野を知ることになる。松本直樹は、世界の神話と日本神話の類似した内容をあげながら、「日本神話を講ずる時、諸外国の神話なども資料として示すことが望まれる。」³⁴⁾と述べている。

日本神話を解体して外国の神話と類似した部分等について知ることは、古代に生きた人類に共通の思想を理解する手掛かりになる。さらに、様々な話が日本神話の文脈に多様な形で組み込まれて独自の世界観が創造されていることもわかる。グローバルな現代社会を生きる学習者が学ぶ「伝統的な言語文化」としての「神話」は、世界の神話と日本の神話をともに人類の言語文化として捉える視点にたつて、位置付けられる必要がある。

5. 学習者の受容

(1) 小学2年生への調査

これまで述べてきたように、再話教材は多様に書き換えられていて、原典の内容を知ることにはできない。そこで、『古事記』大国主神話の紙芝居を作成して実演し、原典の内容は現代の児童にどのように受容されるのかを調査した。

①調査日：2017年9月21日（木）10：55～11：40

②対象：山形市内の小学2年生33名。1学期に光村図書の「いなばのしろうさぎ」の読み聞かせを聞いている。

③時間：挨拶と説明 5分。紙芝居実演 20分。調査用紙記入 20分。

④紙芝居：大国主神話 絵16枚

(2) 結果と考察

①この話を知っていましたか。

ア ぜんぶ知っていた 4名

イ とちゅうまで知っていた 27名

ウ 知らなかった 2名

授業で読み聞かせを聞いているので、「とちゅうまで知っていた」が標準的な回答である。「知らなかった」という回答には、読み聞かせの授業を欠席した・忘れていた等が考えられる。

②「ぜんぶ知っていた」人は、どうして知っていたのか教えてください。

ア まんがや本でよんだことがある	1名
イ よんでもらったり聞いたりしたことがある	3名
ウ テレビで見たことがある	0名

大国主神話の全体を知る機会が児童にあったことがわかった。すでに話を知っている児童にとっては、紙芝居の理解も困難ではないと考えられる。

③「このお話で、おもしろかったこと・よかったこと・心にのこったことなどを書いてください。」(自由記述の一部を抜粋)

- ・おおくにぬしが生きていてよかったなと思いました。
- ・おおくにぬしがけっこうあいてになってすごいなあとと思いました。
- ・おおくにぬしさんがだまされていてかわいそうで、うさぎをたすけて自分もたすけられてさいごにおひめさまといっしょにいてよかったな—とおもいました。
- ・うそつきのきょうだいが、おおくにぬしにひをつけてやけ死んでしまった。おおくにぬしがやさしいところをもっていたので神さまがたすけるところがよかったと思いました。
- ・大くにぬしは、やさしくてほかのかみにだまされたことがあったけど大くにぬしはつよくとてもやさしい人です。
- ・かみのおいしゃさんがすごいなと思いました。
- ・人間では生きかえられないのかみさまでは生きかえたからすごかったです。
- ・おひめさまのゆうこともきいてたしかにやさしい人だとおもいました。
- ・心にのこったことは、がんばってさがしたり、さいごにいっぱいもらってすごい。
- ・火じになった時にたすかってよかったです。なぜかという、おおくにぬしのかみさまがやさしいからです。ねずみがとてもやさしいなあとと思いました。
- ・ねずみがあんごうをつかっていておもしろかった。
- ・大かじでよわかった大くにぬしが、ねずみにやをもらったところが心にのこった。
- ・わたしにとってはお兄さんが弟をやけどさせたとしか思えなかった。こんどはつよいところも、やさしいところもあってまえよりもっとすごくなったと思います。

児童の記述から、教科書の続きの展開を概ね理解できていることがわかる。また、人間は死ぬと生き返らないことを知っているのも、兄弟に欺かれて死んでしまった大国主神が生き返ることに驚いている児童は複数いた。荒れ野に火をつけられた時に鼠が話しかけた言葉「内はほらほら、外はすぶすぶ」を、「暗号」と解釈していることも興味深い。大国主神が鼠に助けられたこと、捜していた矢を鼠がもってきてくれたことを、兎を助けたやさしさのためだと書いている児童も複数いる。原文に即して事績だけの紙芝居の説明でも、児童は自らそこに様々な意味づけをしていることが明らかになった。

④このお話で、「むずかしかったことや、ぎもんだと思ったことを書いてください。」

(自由記述の一部を抜粋)

- ・なんでもつをもたせられたのかな—と思いました。
- ・いなばのうさぎの毛がなおるところ。
- ・どこから、もえた石がきたのかしりたい。
- ・やけ死んだおおくにぬしがいきかえるばめん。

- ・なぜ草むらが火じになった。
- ・なんで火じになったとき、ねずみがきゅうにでてきたのですか。

「なんでもつをもたせられたのかなー」という疑問は、同じ紙芝居を見た3・4年生の回答にもあった。児童の疑問の答えは、『古事記』には書かれていない。児童には、このような自分の疑問を自分なりに想像したり解釈したりする権利が与えられている。一義的な教訓を与えるのではなく、児童の自由な想像を助ける教師の適切な支援が必要である。

この調査から、小学2年生でも、紙芝居などを手掛かりに場面をイメージすることができれば、「稲羽の素兎」の後の複雑な展開も理解できて、自分なりの感想や疑問をもつことがわかった。

筆者はかつて、『古事記』のイザナギ・イザナミ2神による国生みの紙芝居を小学2年生から大学生に行ってその感想を分析した。³⁵⁾ その結果、小学2年生の「驚いた」「面白い」などの感想は、小学校高学年から大学生の感想にも共通していた。また、「最初に生まれた国はどうして小さいのか」「黄泉の国は天国の向こうにあるのか」等の疑問は、興味をもって神話の内容を理解した証であると考えた。

このように多様な解釈が可能な神話教材によって、児童に内在する言語能力・感受能力を発揮させることが可能である。そのためには、一義的な教訓話を与えるのではなく、「神話」の不思議な展開や比喩に気づかせて様々に想像させ解釈させる経験が、伝統的な言語文化に親しむことにつながると考える。

6. まとめ

情報化、国際化、価値観の多様化等の教育環境の大きな変化を受けて改正された教育基本法の趣旨にそって、学習指導要領では「伝統的な言語文化に関する指導」が重視されるようになり、小学校1・2年生の国語に「神話」が明示された。しかし、「神話」というジャンルは明確に説明されず共有もされていない。そこで、現行の国語教科書における「いなばのしろうさぎ」の四つの再話教材の分析を通して、原典である『古事記』『稲羽の素兎』に内包される神話の特性について明らかにした。

再話教材は、神話の辻褄の合わない部分を省略したり現代の思想や価値観に合うように書き換えたりして、動物譚、教訓譚として再創造されている。しかし、『古事記』神話には教訓的な言葉はない。教訓が読み取れるのか、どのような教訓を読み取るのか等は、すべて読者に委ねられている。それゆえ神話は、長い歴史を通して、時代によって人々によって多様に読み替えられてきた。したがって、現代の読者は神話をどう読み替えるか、ということは、児童の主体的な読みに委ねられるべきであると考えられる。そのためには、神話には「教え」がないこと、神話の比喩から何をどのように読み取るのかは一人一人の児童の主体的な読みに委ねられていることを前提とした教材化が検討されなければならない。

『古事記』の「稲羽の素兎」は、前述したように、もとは東南アジア系の動物譚が大国主神話に取り込まれたものである。このように世界の神話は、それぞれ同類の話も多く共有しながら独自性も持っている。情報技術の急速な発展によってグローバル化された現代社会では、「社会的に異質な集団での交流によって互いに理解し合って物事を成し遂げる力」がキーコンピシーの一つとして求められている。宗教や文化の異なる人々を理解するため

に、その思想の根幹でもある神話を知ることは意味がある。そのためには、日本神話を「我が国の伝統的な言語文化」として捉えるだけでなく、世界の神話を「人類の伝統的な言語文化」と捉えて、神話の比喩性・多義性を受容し理解することである。それは、日本神話の解体と原典の尊重をあわせもつ新たな視点をもつことでもある。

現代における神話教材は、戦前の神話教材のように、一義的な解釈を押しつけるものであってはならない。改正教育基本法の第二条第五項は「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」とある。その趣旨を受けて、現代における「神話」の教材化は、世界的な視点をもって、新たに位置づけられる必要がある。そのためにも、「神話」というジャンルの特性やグローバルな現代社会において神話に向き合う意義が、広く議論されなければならない。そこから、神話の比喩性・多義性を現代に伝え、学習者の主体的な読みの可能性を奪わない教材化と指導が共有されると考える。

児童には、「伝統的な言語文化」としての「神話」を受容する言語能力と感受性が内在している。西郷信綱が「神話は独特な比喩表現である」と述べ、鹿沼茂三郎が『古事記』神話の構造から教育の原理を読み取っている³⁶⁾ように、神話の実際を知りその比喩性を豊かに読み取ることを前提とした、新たな観点からの教材化と指導の展開が必要である。神話の比喩を豊かに想像する楽しさを体験することが伝統的な言語文化に親しむことになり、思想や価値観の異なる人々を理解し協働して創造的な活動を行う国語力の基礎を育てることにつながると考える。

注

- 1) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説国語編』 東洋館出版社, p. 7
- 2) 同上書, pp. 43-44
- 3) 山田仁史は、記紀神話について次のように述べている。(山田仁史 (2017) 『新・神話学入門』 朝倉書店, p.107)

『古事記』と『日本書紀』に系統的に神話が記録されたことは、世界的にみても大変まれな出来事だった。ギリシャ神話や中国神話のように、さまざまな書物に神話の断片が散在している場合の方が多いためである。

- 4) 大林太良は、神話の定義について次のように述べている。(大林太良 (1966) 『神話学入門』 中公新書, p.44)

「神話とはなにか?」とはむずかしい問題である。この問題を研究している学者の数だけ神話の定義もまた存在する、といってもいいすぎではないほどだ。しかも単に個々の学者によって神話の定義がちがうばかりでなく、民族が異なり、文化がちがっていると、神話に関する観念もまた、大きく相異してくることがしばしばである。

さらに、ミュンヘン大学のヘルマン・パウマンの試みを紹介した上で、次のような定義を示している。(同書, p.65)

神話とは、原古における一回的な出来事によって、特定の自然現象や文化現象を説明し、基礎づける説話である……その一回的な出来事とは、これらの今日の諸現象

の手本であり先例であり、なによりもその起源である。

西尾光一は、神話を次のように定義している。(西尾光一(1962)『国語教育辞典』朝倉書店, p.387)

人類が未開の状態から、自然界の驚畏を克服し、動物の危害と戦って、人間らしい生活を営むようになり、文化を作り出していく過程に発生した神々についての説話。

ステブリン=カーメンスキイは、神話の基本的特徴について、次のように述べている。(ステブリン=カーメンスキイ著、菅原邦城・坂内徳明訳(1980)『神話学入門』東海大学出版会, p.129)

あらゆる神話の特徴である基本的で、事実上唯一のことは、それがいかにありそうもないものであろうとも、神話は真実として受け入れられた物語であるということである。

- 5) 森川敦子(2010)は、大人83名を対象としてアンケート調査を行ったところ、22名(26.5%)が日本神話を知らなかったという結果を報告し、「大人さえ知らない日本の神話」と述べている。「意図的、計画的に、昔話や神話の読み聞かせを行う必要性と目的」『教育科学国語教育』52巻1号, 明治図書, p. 37
- 6) 小川雅子(2016)「学習者の発達段階に着目した神話教材の開発に関する研究」『山形大学教職・教育実践研究』第11号, pp. 29-37
- 7) 教育出版編集局(2011)『教師用指導書』pp. 168-169
その他に、述部が補われたり句読点などが整えられたりしている。
- 8) 本稿における『古事記』本文の引用は、山口佳紀・神野志隆光(1997)校注・訳『新編日本古典文学全集古事記』小学館による。
- 9) 棚田真由美(2001)「昭和戦前期小学校国定教科書における『古事記』の教材化に関する考察」全国大学国語教育学会『国語科教育研究第49集』, pp. 17-24
- 10) 海後宗臣(1964)編『日本教科書体系 第8巻』講談社, pp. 421-422
- 11) 海後宗臣(1964)編『日本教科書体系 第9巻』講談社, pp. 47-49
- 12) 谷本由美(2011)「2011年度小学校教科書の「いなばのしろさぎ」:多義性の視点から日本神話再登場のあり方を考える」『児童文学研究』44号, p. 17
- 13) 同上書, p. 22
- 14) 本稿における『日本書紀』の引用は、小島憲之他(1994)『新編日本古典文学全集 日本書紀』小学館による。
- 15) 原田留美(2016)「伝統的な言語文化の再話作品の諸相2—東京書籍発行小学校国語教科書掲載の「いなばの白うさぎ」について—」『新潟青陵学会誌』第8巻第3号p. 17
- 16) 前掲書(12), p. 24
- 17) 西郷信綱(1975)『古事記注釈 第一巻』平凡社, p. 346
- 18) 佐佐木隆(2007)『日本の神話・伝説を読む』岩波新書, p. 23
- 19) 大野晋編(1968)『本居宣長全集 第九巻』筑摩書房, p. 426
- 20) 倉野憲司(1976)『古事記全注釈 第三巻』三省堂, p. 190
- 21) 中野幸一・榎本千香(2014)『ちりめん本影印集成 日本昔噺輯篇第1冊英語版』勉

誠出版, pp. 127-128

- 22) 石澤小枝子 (2004) 『ちりめん本のすべて』 三弥井書店, p. 275
- 23) 前掲書 (20), p. 201
- 24) 前掲書 (21), p. 130
- 25) 前掲書 (19), p. 432
- 26) 赤田光男 (1997) 『ウサギの日本文化史』 世界思想社, pp. 38-41
- 27) 大西晴隆・木村紀子 (2004) 校注『塵袋2』 平凡社, pp. 180-181
- 28) 原田留美 (2011) 「伝統的な言語文化の再話作品の諸相—学校国語科教材「いなばのしろうさぎ」の場合—」 『新潟青陵学会誌』 第4巻第1号, p. 21
- 29) 吉田敦彦は、大国主神の受難を次のように解釈している。(吉田敦彦 (2008) 『日本の神話』 青土社, pp.110-112)

土地の神さまであるオホクニヌシの命は…中略…死んではまた生き返るような目に、何度もくり返して会わねばなりません。…中略…焼き畑を焼く火は、その土地にいる動物を焼き殺してしまうばかりか、注意をおこたれば周囲の山まで、山火事で燃やしてしまいかねぬほど、激しい勢いで燃えるのです。だからこういうやりかたで農業に勤しむ人たちが、畑を焼く火で土地の神さまも苦しんだり焼け死ぬような目にあうと考え、そのことを神話に物語っても、不思議ではないと思われます。
- 30) 前掲書 (21), p. 132
- 31) 谷本由美 (2011) 「明治期児童向け古事記「いなばのしろうさぎ」のはじまり—チェンバレン「ちりめん本」から巖谷小波「日本昔噺」へ—」 『同志社女子大学生活科学』 第45巻, p. 48
- 32) 田中千晶 (2007) は、明治時代から終戦時までの『古事記』に依拠した児童向けの再話について考察している。「戦時下における児童向け『古事記』の受容と変容—引用の観点から—」 『児童文学研究』 第40号, pp. 15-29
- 33) 関根賢司 (1997) 「神話・伝説・昔話と物語はどう違うのか」 『国文学』 第42巻2号, 學燈社, p. 8
- 34) 松本直樹 (2001) 「神話教材の可能性を考える—神話研究者の立場から—」 『早稲田大学国語教育研究』 21, p. 67
- 35) 前掲書 (6), pp. 31-34
- 36) 鹿沼茂三郎 (1969) 「地学教育の基本概念について」 日本地学教育学会 『地学教育』 第22巻第6号, p. 129

この研究は、科学研究費（課題番号15K04401）の助成を受けたものである。

学習指導要領における神話の位置づけと教材化の検討
—小学校の国語教材「いなばのしろうさぎ」を中心に—

教科書における書き換えの比較

	教育出版	光村図書	東京書籍	三省堂	古事記	国定教科書 (第五期)
作者	ふくなが たけ ひこ	なかがわ りえ こ	かわむら たか し	みやかわ ひろ	-	×
題名	いなばのしろう さぎ	いなばの白うさ ぎ	いなばの白うさ ぎ	いなばの白ウサ ギ	稲羽の素菟	白兔
単元名	むかしのお話を よむ	きいてたのしも う	言いつたえられ ているお話を読 もう	むかしばなしを たのしもう	-	×
冒頭文	いずもの国から おとなりのいな ばの国へ行くと ちゅうの海岸 を、八十人の兄 弟のかみさま が、行列を作っ て歩いていまし た。	むかし、むかし、 大むかし。	いずもの国のお おくにぬしのみ ことには、たく さんのあに神が いました。	とおいむかしの ことです。	故、此の大国主 神の兄弟、八十 神坐しき。	白兔が、鳥から 向かふの陸へ 行ってみたいと 思ひました。
末文	—これが、い なばのしろうさ ぎです。	それからという もの、「オオク ニヌシこそ、八 十人の兄弟の中 でいちばんすぐ れた方だ。」と、 世につたわるよ うになりました。	かしこくて、心 のやさしいお おくにぬしのみ こととは、この 国をよくおさめ て、人びとのく らしは少しずつ ゆたかになって いきました。	ふかくふかくあ たまを下げ、 なんべんもなん べんも、おれい をいったのでし た。	脩を負はせども 汝命ぞ獲たまは む」とまをしき。	「……のちには きとおしあわ せにおなりでせ う。」と申しまし た。
挿絵の枚数 と内容	4枚： 兎・おおくにぬ し・わに	2枚： オオクニヌシ・ うさぎ・わに	3枚： うさぎ・おおく にぬし・さめ	4枚： ウサギ・サメ	-	2枚： 兎・わにざめ・ 大国主神
やがみひめ	無	きれいなおひめ さま	やがみひめとい うきれいなおひ めさま	無	八上比売	無
八十神の数 と関係	八十人 兄弟	八十人 すえっ子	たくさん すえっ子	おおぜい (記載なし)	八十神 兄弟	おおぜい 弟
わに	わに	わに(さめのこ と)	さめ	サメ	和邇	わにざめ
わにとの会 話	有	有	×	有	-	×
八十神の性 格	わらいながら	力をきそいあ う・いくじなし とわらい・こき つかいました・ からかって	いじわるな	いじわるな	-	×
大国主神の 性格	やさしく・しん せつな	あらそうことを このみません・ やさしく・すぐ れた	やさしい・かし こい・心のやさ しい	やさしく	-	おなさけ深い
兎神	×	×	×	×	兎神	×

Summary

Masako OGAWA

The positioning of Japanese mythology in the Guidelines for the Course
of Study and considerations for creating teaching materials:
An exploration centered on *Inaba no Shiro-usagi* in elementary school
Japanese textbooks

The Fundamental Law of Education was revised in 2006 in response to various changes in the educational environment. Based on this revision, traditional linguistic culture was emphasized in the 2008 Guidelines for the Course of Study. Furthermore, mythology was added as an instructional item in Japanese for the first and second-graders in elementary schools. Currently, *Inaba no Shiro-usagi*, which was rewritten for children, is included in textbooks published by four out of five textbook publishing companies. The authors of the publishing companies of each rewrite differ. In addition, each rewrite conveys a moral message. These four rewrite are different from the original text in *Kojiki*. In this study, I have summarized the diverseness of the rewrite of *Inaba no Shiro-usagi* and the issues encountered when using it as teaching material. Subsequently, I conducted a survey on elementary children's understanding of mythology acquired from *Kojiki*. From the survey findings, I utilized the characteristics of the genre of mythology and explained how to create teaching materials and provide instructions that cater for children currently.